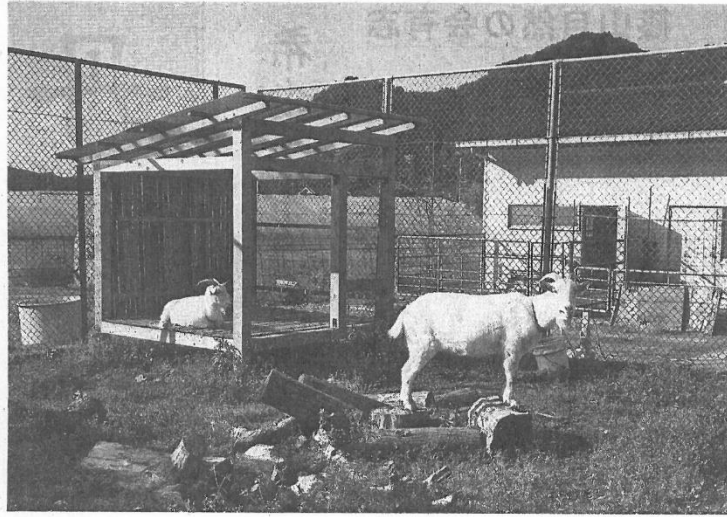


竹使いヤギ小屋製作

放置竹林の
問題解決へ 東雲高と関大が連携

篠山東雲高校のアグリサービス類型2年生（8人）と関西大学環境都市工学部の学生が所属する住環境デザイン研究室「ふくたけ」（14人）が、共同で同高のヤギ小屋製作を進めている。放置竹林の問題解決策の一環として、建築材に福住産のモウソウチクを使用。すでに1棟は完成しており、2棟目を今年度末までに完成させる計画で、高校生、大学生それぞれの学びを生かした設計で小屋が出来つつある。同高の さん（篠山中出身）は、「建築を専門に学んでいる大学生からさまざまな知識や技術を教わりながら作業を進めているので面白い。ヤギがストレスなく過ごせる小屋を完成させたい」と張り切っている。

同高は雌雄の親子ヤギ2頭（母・あめ、子・ゆき）を、飼育実習と「除には木材を使用し、今年草葉員」として飼っている。4〜9月に製作した。縦横、高さは共に約2メートル。1棟目の小屋は柱や梁が、地面から20〜30センチに飼育していきつづいた。床面を配置した高床式。「高い所に登りたがる」習性を考慮し、床の高さを短冊状に割って節を取



短冊状に割ったモウソウチクをシュロ縄で編んで床を作る高校生と大学生

完成した1棟目のヤギ小屋でくつろぐ「あめ」と「ゆき」 丹波篠山市福住で

学校での学び設計に反映

さん（23）は「大学院1年生」は、「大学の授業では、机の上で設計し、模型を作ったが、ここでは地域の人や高校生たちとコミュニケーションを図り、そこで出た意見をデザインに反映させたりしてより実践的な学びができています」とほほ笑み、「作ったものが地域の場として愛されることが大事。ヤギ小屋はこの先も定期的に補修が必要になるので、多くの世代が関わることになる。高校生には、卒業後も母校や地域に愛着を抱くシ

ンボルとしての役割も果たして欲しい」と期待

は1棟目よりも40〜60センチ高くし、床面に傾斜もつける。さらに1棟目と2棟目を、傾斜がついた短い橋で連結させる計画。2棟目は竹のみで製作。竹に穴を開けてしまつと、その部分から腐りやすくなるとし、柱と梁の結合箇所には、大学生がベニヤ板で自作した三角形の接合部材を介し、金属バンドで結束して組み上げるといふ。このほど、床面を製作する際には、同高近くの竹やぶから切り出した竹を短冊状に割って節を取り、シュロ縄で編んで約1回ほどのペースで同高へ通い、高校生たちと製作に励んでいる。

同研究室代表の

2024年12月12日

丹波新聞